
真実とは。

トラナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実とは。

【Nコード】

N7123X

【作者名】

トラナ

【あらすじ】

幼くして突然、母を病気で失ってしまった姉けいこ、弟あきと。その母からの遺言ともいえる一枚の紙切れから、最期の贈り物を受け取る。しかし、その贈り物は見知らぬ一人の名前が書いてある一枚の紙切れだった。果たしてその母からの贈り物とは、いったい何であるのだろうか……。けいここと、あきとの姉弟生活。フィクションホームドラマ。

一枚の紙切れ

「誰にも譲れないもの」。そう聞いて、今現在あるという人、そうでない人、または何だそれは、などと、人はそれぞれいる考えることと思う。あるという人で例えるなら、それは肉親であったり、恋人、友人など、自分にとって大切な人のことを挙げる人もいるだろう。またある人は、金や物、地位、さらに名誉や自分自身の顔や身長、性格といった個人の持つ特徴を主張する人もいるだろう。さらには、何それわかんないと、とりあえず言ってみた人であつても、よく尋ねるなら、それはつまり個人の持つプライドのことでしょう、と素直に答える人もいると思う。いずれにせよ、それらは私にとつてこの小説を書くことと思つた原点に繋がる。それは、今現在の生活の中、個人にとつてまさに、そこを主張する力が薄れているように感じられるからである。その人本来ある、素直な気持ち、またはプライドが実は何かの力によつて後回しせざるを得ない状況になつてしまつたのではないだろうか、と思つたからである。このように、もしそのようであるならばという思いが強くなつてきたため、今回執筆に至つた次第である。では、このままだと小説に入らず一つの論文になつてしまふ可能性が出てきたため、そろそろ本編（短編小説）を始めていこうと思う。

夕暮れ時、けいこは一人歩いていた。稲刈りを終えたトラクターは、がたがたと音をたてながら車庫を目指していた。山から差し込む夕日に、反射したオレンジ色の水たまり。ぱたぱたと音が聞こえそうなほど、大きな羽をしたトンボ達。しんしんと流れる川のそばでは、りんりんと鳴くコオロギ達。けいこはそれらと、まるで会話をしているかのように時々笑つたり、おどけたりしながら家路に着いた。家のドアを開ける頃には、すでに辺りは薄暗くなつていた。

「ただいま。」といつも通り、比較的大きな声で家の中に入っていた。しかし、いつもは聞こえてくるはずなのに、いつまでたっても母親の「おかえり」の声がしない。もう一度言うのもなんだし、とりあえず家の中に入ろう、と靴を脱いで廊下を歩いた。すると、まだかすかに夕日が差し込む居間で、弟のあきとがうつむいて座っていた。けいこは「何よ、あき。いるなら返事くらい・・・。」と言いかけたところで、異変に気づかざるを得なかった。弟のあきとは、すすり泣いていた。けいこは弟が泣いている向こうに、畳の上の布団に白い布を顔に被せ、仰向けに横たわっている何かをみつめた。それが、母親であることに気づくのに、そう時間はかからなかった。けいこのひざは、自分でも知らぬ間にぐくぐくと震えだし、終いには全身に伝わっていった。弟に何か問いかけようにも、声がほとんどでない。「あ、あ、あ・・・。」と。口がたがたしながら、ペタンと空気が抜けたタイヤのようにその場に座り込んでしまった。かすかな夕日に照らされた一粒の涙が、畳の上で跳ね返ったように思えた。その夜二人は、母親の名を大声で叫び続けたのだった。

母が亡くなるという突然の出来事で、近所に住む普段あまり付き合いのない人達が集まり、皆一見真剣そうな会話をしながらも、その子供を横目に見やりながら、その中の一人がけいことあきとに、「葬式をしないとは、何あほな事を言っているんだい、あんたらは」と、右の眉毛をひくひくさせながら、ある年配の女性が二人に言った。二人はその言葉を聞き、いったんそれぞれ顔を見合わせた。再び下を向いて黙った。しばらくすると、姉のけいこがうつむいたまま、「骨は川へ。骨は川へ・・・。」と小声で繰り返していた。それを横目で見ていた弟のあきとも、姉の様を真似ながらぼそぼそと「骨は・・・。」と言った。すると、その近所のある人が、「この辺りでは、死んだ人は土の中に埋めることになっているから、それは無理な話だよ。」と諭すように言った。しかしそれでも二人は、その言葉をまるで呪文を唱えるかのようにぼそぼそと、ただただ繰

り返すだけであつた。

結局、二人の意見が通じたのか、それを見ていた近所の人達が折れたのかどうか定かではないが、母の遺骨は川へ流すことになった。その当日、けいこ、あきと、おじ夫婦の四人以外、誰も参列者はいなかった。けいこことあきと二人は、「せーの」と同時に橋の上から両手をかざした。小さな掌の上にあつた母親の遺骨は自然に吹く風によつて、次第にきらきらと形を残さず消えていった。その様子を見て、おじ達は二人に、「また近いうちにいくから。」と言ひ残し、その場からさつさと立ち去つて行つた。残された二人は、しばらくその場で立ちすくんでいた。どのくらいそうしていただろう。気づくと、陽はすでに暮れようとしていた。それはまるで先日、けいこがトンボ達と戯れながら帰宅した時を思い出すような情景だつた。それにとつさに気づいてしまつたけいこは、慌ててあきとに「あき、これからどうしようか。」と、自らの思いをかき消すかのように言つた。弟のあきとは、つま先をとんとんと打ちつけながら、「お母さんは、この川が好きだつたよね。お姉ちゃん。」と、突然言ひ出した。けいこは、あきとに聞いても仕方ないかといつた表情で、少し下を向いておし黙つていた。するとあきとは、にこつと笑ひながら一人でこう続けた。「夏休みにさ、三人で魚とりに行つたね。あの時、お姉ちゃんはころんでびしょ濡れになつたんだよね。」と、けいたけた笑ひながら、けいこに問いかけた。けいこは、「ねえ、あき。聞いているの。本当にどうしようか。おじさんの家に行こうか。」と、苛立ちと焦りを少し抑えながら口早に言つた。するとあきとは今までの笑顔から一転して、「僕はおうちがいい。」と静かに呟いた。それを聞いたけいこは、なんだかすつとんと急に胸が軽くなつたよう気がした。あきとは続けて、「お姉ちゃんは、どうしたいの。」と尋ねた。するとけいこは、「お姉ちゃんもその方がいいと思つた。」と、笑顔で弟に答えた。あきとは、自分と同じ気持ちでいた姉に対してうれしく思い、その手をそつと握つた。けいこも、それ

に答えるかのように、優しく弟の手を握り返した。そして二人はそのまま手をつなぎながら、時には前後に大きく揺らして家路を急いだ。二人で生きていくんだ。そう、お互いが心に決めた瞬間だった。幼い二人にとつては、とてつもなく大きな問題だった。しかし、心のどこかで大丈夫と二人は少しだけ思えてきた。そして気づけば、辺りは急に暗くなっていた。

それからしばらくは、姉であるけいこが幼いながらも、炊事、洗濯、掃除をこなした。いや、こなしたというよりか、こなさなければならぬ状態だった。そして今日、掃除をしている時のことだった。何気なくたんすの戸をけいこがあげた時、偶然にも一枚の白い封筒を見つけたのだった。そこには、「けいこ、あきとへ。」と書いてあった。それを見てけいこは、一瞬うれしくて飛び跳ねそうな気持ちを抑えつつ、返って恐る恐るその中身を広げてみた。すると封筒の中には、母親の見慣れた文字でこう書いてあった。「二人がこの手紙を読んでいる時には、おそらくお母さんはいなくなった後でしょう。寂しい(さび)思いをさせてしまつてごめんね。これから大切なことを書いておくからよく読んでね。まず、けいこへ。あきとの面倒をよくみてやつてね。けいこは、お姉ちゃんだからきつと大丈夫。大変な時でも、けいこならきつと幸せにあきとと暮らして行ける。あきとへ。お姉ちゃんの言うことをよく聞いてね。あきとは男の子だから、大きくなつたらお姉ちゃんを支えていつてね。二人とも、元気でいてね。いつまでも、めそめそしないでね。お母さんは、いつでも二人を見守っているからね。それから、土間のくぼみをあとで見てね。家の貯金と、二人への贈り物が入っているよ。最後に……。」「と、ここまで読んでいると、その下はけいこあきとの涙でぐしょ濡れになつてしまつていた。なんだかお母さんが今ここにいるかのように問いかける、その文字一つ一つがなんとも言えず、たまらなかつた。

その手紙を読んでから、さらにけいこは毎日頑張った。朝は四時半には起きて家事一切をこなしていた。夜は、二人とも九時前には床に就いた。そして週末は、幼い子供達を一応心配しているということから、母方の兄とその嫁が家に来る。しかし、けいこことあきとは昔からよく思っていないこともあり、息苦しく感じながら生活していた。何故二人がそう感じていたかというところ、その母親の兄と嫁が来る時は、夕飯の支度は兄嫁が作るため必要ないのだが、その夕飯の後に兄の酒盛が始まる。それは夜10時を過ぎても落ち着かず、子供達にしてみれば夜中まで酒を呑み、あれやこれやと会話をしているのが大人なのかと、いささかがっかりした気持ちを思い出していたからだ。ただその親戚が来ることによって二人には、金銭的な余裕は少し生まれたが、逆に変な疲労が残った。けいこ達は、仕方なく考える他なかった。

昨夜は夜中の12時頃まで、大人達の話声がけいこの耳には聞こえていた。あきとはその間、ぐうぐうと寝息をたてながら始終眠っていた。けいこは突如、明日は6時まで寝ていようと思い、目覚まし時計の針をセットしなおした。しかし、結局一旦6時に起こされたもののあまりの眠さから、なんだかんだ7時頃まで眠ってしまった。しかしけいこは再び、はっとして時計を見た。すると、とつくに7時を回っていたので、慌てて飛び起きた。大人たちはまだ寝ているのか、家の中はしんとしていた。洗面所で顔を洗ってから、足早に台所に向かった。するとそこには、長い髪をゆらゆらしながら後ろ向きに立つ女性がいた。そしてその女性が、けいこに気づくとゆっくり振り返りながら、「おはよう。」と言った。けいこは聞き慣れた声と、そのうしろ姿にすぐさま反応した。「お母さん。」けいこは、まさかと思いつつも必死に目を何回も擦り、さらにはその立っているお母さんめがけ、もうすがりつくような思いで流台まで全力で走った。あと少し。もう少しで、あの母の温もりに辿りつける……。その一歩手前で、ふっと瞬時に跡形もなく消えて

しまった。そしてそこに残っていたのは、母の確かな残り香のみだった。けいこは、「お母さん、お母さん。」と何度も呼んだが、それきり何も起こらなかった。その騒ぎを聞きつけ、おばがやってきた。「いったいどうしたんだい。」と、いかにも不機嫌そうなおばが、けいこに言った。けいこは、目を丸く見開いたまま、「い、今、お母さんがいた。」と、いささか興奮気味に伝えた。おばは、「お母さんだって。夢でもみえたのかい。朝ごはんは私が作るから、もう少し寝てらっしゃい。」と、半分呆れたように言った。けいこは、夢でも見てたのかと自分自身に問いかけた。しかし、顔を洗った時に拭ききれなかった水が、まだ首元で濡れている。このことから、「これは、夢なんかじゃない。」と、心の中で一人確信していた。そしてこの出来事は、これからの不思議な日々が始まりであった。

けいこはそれから度々、母を感じる事が出来た。ある日は、誰もいない自宅に着き玄関を開けた時、あのいつもの香りがした。それだけでも、幸せな気持ちになれた。「ただいまあ。」とその目には、うつすらと涙を浮かばせながら、無理に元気よく、声を張り上げてみたりした。しばらくすると、「ただいまあ。」と元気よく、弟のあきとが帰ってきた。返事がないのであきとは、台所で食事の準備をしている姉のそばまで行き、もう一度大声で言った。するとけいこは、弟に気づかれぬよう涙をぬぐいながら笑顔で「おかえり。」と静かに言った。あきとは、「・・・。お姉ちゃん。」と、一瞬、いつもと雰囲気が違う姉を感じ取ったが、すぐさま続けて、「そういえばお姉ちゃん。お母さんの言っていた贈り物ってなんだろうね。」と、首をかしげて、右手をあごの下で握りながら言った。それを聞いたけいこは、はっとして、「そうだ。忘れてた。」と、洗っていた食器を無造作に台所のシンクへ投げ入れ、慌てて水道の蛇口をひねり、それと同時に土間に向かって小走りで行ってしまった。あきとも、すぐに後を追いかけた。土間の隅に大きな柱があり、その横には野菜や米など食料を保管しておくためのくぼみがある。その

中にあつた古いつぼを見つけるとけいこは、預金通帳と印鑑、一枚の紙切れを取り出した。紙切れには、なにやら漢字で名前が書かれていることは二人とも理解できたが、果たしてそれが誰なのかまったく検討がつかなかった。二人とも、なんだかがっかりした様子でどつと疲れてしまい、言葉少なに「今度、おじさん達が来たら聞いてみようか。」と言った。「贈り物、楽しみにしてたのに……。」と、あきとは今にも泣き出しそうだった。それを見てけいこは、自分もがっかりしてはいたけれど気を取り直して、「さ、あき。ごはん食べよっか。」と、あきとの手を引いた。少しぐずぐず言っていたあきとは、姉に手を引かれながらも、しぶしぶと台所へ戻った。しかし、改めて食卓を覗き込んだあきとの表情は、それまでとは一変した。その日の夕食は、いつもより豪華であつた。姉のけいこは、母親をよく助ける子供であつたのでほぼ毎日、一緒に食事の準備をしていた。そのため一通りの献立はもちろんのこと、少し手の込んだおかずも作れるようになっていた。本日の献立は、ミートスパゲティー、鶏肉のソテー、みず菜のサラダであつた。あきとは、先ほどまでとは打って変わった様子でにこにこしながら、「ね、ね。お姉ちゃん。もう食べていい。」と、姉に尋ねたと思いきや、ほぼ同時にフォークに巻きつけていた大人の口でちょうど一口分くらいを、小さな口へ押し込むように食べ始めた。けいこは、そうした弟の様子を見ていたら、なんだか可笑しくなり、試しに自分も同じような食べ方を真似てみた。すると、あきとはむっとした表情で「真似しないでよ。」と、言おうと思つた。しかし、もうすでに口にはいっぱいスパゲティーが詰め込まれていたので、実際には、「まにえしゅにやいべよ。」と、なんだかはつきりしない発音をした。それを聞いたとたん、けいこは、いよいよ笑いを堪えきれなくなり、「きゃはははは。」と、声を出して笑つた。一度笑い出したけいこは、その後あきとが何を言つても可笑しくなり笑い続けた。あきとは、最初は笑われてむっとしていたが、姉が久しぶりに笑っている姿を横目でみてみると、なんだか自分も徐々にうれしくなつてきた。そ

してそのうち姉と一緒に、近所に響くほど笑いあった。

翌朝、おじ達がいつものように歩いてやってきた。おじ達の家は、けいこ達のところからさほど遠くないところにあるのだが、子供達が歩いていくには少し距離がある場所に住んでいた。共に家の中に入り、お茶を用意するために台所に向かう途中で、けいこは思い出した。すると、仏壇に置いてある母からの紙切れを手に取り、「この紙切れがあっただけど……。」と、けいこはおじにそれを手渡しながら言った。おじは、どれどれと言いながらそれを見た。するとおじは、一瞬「あっ。」と思わず、声をもらした。けいこは首を傾げて、あきとも近くに寄ってきた。二人は不思議そうな表情を浮かべながら、おじの顔を見つめてみると、おじは、ふうと一息ついた後に、「この名前は、お前達のお父さんだ。」と、こちらを注目している二人に告げようとした。しかし、実際におじから出てきた次の言葉は、「さあ、誰なんだろうね。」と、落ち着かない様子で答えた。それを見ていたおばも、おじの様子を察しその紙切れを覗き込み首を傾げて、「知らないなあ。心当たりもないし……。」と、大人二人は嘘をついた。それを聞いていた、けいことあきとは、母がくれた贈り物の意味がますますわからなくなっていた。あきとは、おじ達に、「ねえ、この字はなんて読むの。」と尋ねた。するとおじは、少し渋ったような声でこう言った。「総重そうじゆう 勝巳かつみ。」すると、あきとは、「そうじゆうだって。変な名前。」と姉に言った。けいこは、「人の名前を変とか言っちゃだめだよ。あきとがもし言われたら嫌でしょ。」と尋ねるとあきとは、「うん、わかった。もう言わない。」と、舌を少し出した後言った。その様子を見たけいこは、「この辺りでは、聞かない苗字だね。」と、大人二人に問いかけた。おじ達は、ううんと言いながらあいまいな返事をした。けいこは、もうこれ以上この人達と話しても何も情報は得られそうにないと思ったのか、「うん。ありがとう。」と礼を言い、続けて「これからは、困ったことがあつたら相談します。だから、毎週は

来なくて大丈夫ですから。」と、真剣な表情で伝えた。おじ達は、
なんだかいたたまれない気持ちになり、けいこの申し出を受け入れ
た。そして、お茶を飲み終えた後、大人二人は肩を並べて自宅へ帰
っていった。

一枚の紙切れ（後書き）

母からの贈り物が、今後二人にどのような事をもたらすのだろうか・・・。次回、「贈り物と二人の子供達。」お楽しみに。

贈り物と二人の子供達？

少し肌寒くなってきたある朝のことだった。けいこは、いつものように食事の用意をしていた。「そろそろあきとを起こさないとい・・。」と、目玉焼きをしたフライパンの火を止めて寝室へ向かった。いつものように敷布団からはみ出しているあきとは、首を斜めに傾けながらまだ眠っていた。けいこは、慣れた様子で「ほら、もう起きないと朝ごはんなしだよ。」と言いながら、あきとの掛布団を引っ張り言った。「ううん・・。」と言いつつ、欠伸をしてあきとは「もう、お姉ちゃん。まだ早いよう・・。」と、いつものように言い、目をこすりながら起きてきた。けいこは、「顔洗ったら、朝ごはんにしようね。」と、笑顔で弟に言った。あきとは「ううん。」と言いながら、洗面所へふらふらと向かって行った。

顔を洗って食卓へ来たあきとは、まだ眠そうな顔をしていた。そして目を薄開きにしながら、姉の用意した朝食を見つめていた。けいこは、弟が席についたのを見て「さ、食べよう。」と、箸を手にとった。そしていただきますといい、食事を始めた。あきとは自分の席についたものの、まだ時折まぶたが閉じそうになり、うつらうつらしていた。けいこはそのような弟を横目で見て少し微笑みながら、一人で黙々と食事を進めていた。すると、あきとは、むくりと上体をゆっくり起こして箸を手に持ち、しばらくするとぱくりぱくりと食べ始めた。目は半開きのままである。ちょうどその時、玄関の方でがらがらと音がした。二人ともほぼ同時に食事の手を休めて音がした方を見ていた。数秒たった後「おおい、おおい。」と、低い大きな声がした。二人とも驚いて、いったいなんだろうと顔を見合わせていた。するとあきとは、大きな声がしてはっと目が覚めたのか、やけにさっぱりした顔で「お姉ちゃん、お客さん。」と言った。けいこは、そうみたいねと言いながら、持っていた茶碗をテー

ブルに置き、はいと返事をしながら玄関の方へと向かっていった。

玄関には、中肉中背で白髪交じりの男が腰掛けていた。その男は再び、けいこが玄関に現れる少し前に「おおい、いるかい。」と、姿に似つかぬ声を張り上げた。けいこは急いで駆け寄り、玄関にいるその男の顔を見た。やつぱり知らない人だと思ったが、なぜか不安な気持ちは幾分落ち着いていた。こんなに朝早くの来客は、身内以外では滅多にない。けいこは、その男の姿を見るとすぐさま「いたいどちらさまですか。」と、いくらか強い口調でその男に言った。するとすぐ、「どちらさまでえすかあ。」と、素つ頓狂な声が出た。あきともまた、姉の後をついてきていたのである。その二人の様子を見て、初老の男は険しい表情で「何んだと、おい。どちらさまだと……。困ったもんだ。」と、静かに言った。それを聞いてけいこは、「困るのはこっちの方だよ。」と、心の中でぶつくさ言った。この男は、ひよつとして母に用事があるのかもしれないと、とっさに思ったけいこは「あおう。母は先日亡くなりましたけれども……。。」と、一応伝えた。すると男は、「……。」「少しうつむき黙った。しばらくして、「まあ、ちよつと休むとするか。悪いがお前ら、この荷物を奥まで持つて行ってくれ。」と男は、ぶつきらぼつな口調で二人に言った。それを聞いたけいこは、とたんに何か吹っ切れたかのように、「知らない人は、家に入れません。」と、きつぱりその男に向かって言った。そしてあきとも「はいれましえん。」と、大きな声で続けた。すると男は、「はあん、なんだお前ら。俺はお前らの母親も、お前らも知っている。だから安心しろ。いいからとにかく少し休ませろ。疲れているんだ、俺は。」と言い靴を脱ぎ、よつこらしよと言いながらゆっくり立ち上がり、居間へとのさのさ向かっていった。二人は、「何だ、このおじさん」とそれぞれ思い、大きな声を張り上げようとした。しかし、ここで騒ぐとかえって危険であるような気がした。けいこは、あきとにそつと口元を塞ぐしぐさをして合図を送った。意外と姉の言うことは

聞くようになったあきとは、姉と同じようなしぐさを真似た。母の知り合いのような事を言っているし、とりあえずここは、この男の言うようにしておこう、と二人は目で確認しあった。

荷物は大きな風呂敷と、小さなスーパーの袋の一つづつなので、それぞれ引つ張るように居間へと運ぼうとした。けいこは風呂敷を引つ張りながら持ち上げてみようと、少し宙に浮かした。その時、一枚の写真が二人の前にひらひらと舞い降りた。けいこはその写真を、何気なく拾い上げ覗き込んだ。そこには一人の若い女性が、赤いヘルメットをかぶりバイクにまたがって親指を突き立てている様子が写っていた。なんともいさましく、しかしどこかで悲しそうな眼をしているのが印象的だった。居間へと歩きながら、何気なく後ろを振り返った男がそれに気づくと、けいこの手からそれを無理やりひったくるようにして、「いいからさっさと運びやがれ。」と、怒鳴りつけるように言った。けいこは、ぶつぶついいながらまだ途中だった荷物を、しぶしぶ引つ張って居間へと運んだ。その男は顔を幾分赤く染めながら、その写真をそそくさと着ている上着の内ポケットへ突っ込んだ。

贈り物と二人の子供達？（後書き）

突然、家上がりこんできた初老の男。 いったい何者なのである
うか。 次回、「贈り物と二人の子供達？」 お楽しみに。

贈り物と二人の子供達？

やがて夜になった。二人の子供達は、あの初老の男についてお互いどう思うか、それぞれ考えあつていた。けいこは夕食の準備をしていた。あきとも、寝室の準備をしながら、お互い何かを不満に思う気持ちを抑えてそれぞれ働いていた。ただあきとは、食卓に来て「お姉ちゃん、あの人。これから一緒に住むのかなあ。」とスキップしながら近づいてきて、どこか嬉しそうに姉に尋ねた。ちようど夕食を作り終えたけいこは、そんなあきとの顔にあと数ミリという所まで近づき、「いやよ。あんな人必要ないわ。何よ。いまさら大きな顔をして、父親だなんて言われたってピンとこないわ・・・。」と、冷静に幾分大人びて答えた。実は、昼間の騒動の後、その男がいまいち反応がない子供達を前にして、「まだぶつくさ言っているのか。いいか、よく聞け。俺は、お前らの父親だ。」と顔を赤らめながら叫んでいたのだ。

「おおい、風呂上がったぞ。お前達も入ってしまえ。」と、風呂場の方から男の声がした。もうすでにこの家の主人だと言わんばかりに、二人を「お前達」と呼ぶ始末。それを聞いたあきとは、即座に「まだいいや。」と返事をした。けいこは、テーブルの上に煮付けた魚の入った皿を、ぴしゃりと置いた。「何だ、入っちゃえばいいのに。」と、その男は風呂から出てきて、腰にバスタオルを巻きつけ頭をハンドタオルで拭きながら言った。そして食卓を見て、「お、なかなかうまそうじゃねえかい。とりあえずビールでも飲むか。俺が持ってきたビニール袋に入ってるだろう。ちよつと出してくれ。」と、洗い物をしているけいこに言った。けいこは、「冷蔵庫に入ってますけど。」と、これまたぴしゃりと言い放った。すると男は、「何をぴりぴりしてやがる。なかなか気が利くじゃねえか。さすが俺の娘だ。ははは。」と、上機嫌で冷蔵庫を開けてビールを一本取

り出しながら言った。けいこは、さすがに頭にきたようで「いきなり家に来て父親だなんて……。いったい、誰が信じると思ふの。おじさん達に電話してみるから。」と、半分泣きそうになりながらも、必死に伝えた。男はその言い分に身じろぎもせず、「まあ、待てよ。俺は、別に誰に電話してもらっても一切構わないがな。ただ、向こうも実は迷惑なんじゃないのかい。どうなんだい。」と、けいこの顔を覗き込み、意味深に答えた。

それを聞いたけいこは、何故か冷静さを取り戻していた。待てよ。そういえばおじさん達は、母の葬儀の時や、週末に家に来る時も、なんだか仕方ないからという雰囲気か漂っていたなあと、男の話を聞いてわかる場所があった。そのため、けいこは男を睨み付けてはみたけれども、少し眼を伏せて唇をかみ締めながらしばらく黙っていた。すると男は、「な。大人はよ、そういう奴も中にはいるんだよ。実際、わかる場所あるんじゃないのかい。」と、にやにやして、煙草に火をつけ言った。そしてふう、と煙を吐き出した後、続けてこう言った。「だから電話してくれたって、俺は全く構いやしねえよ。ただ、俺がお前達にここまで言っているのにさ、それでもこいつは信用ならねえというのなら、お前らのおじさんだろうが誰だろうが、お前達、勝手にどこへでも電話すればいいだろうさ……。」「けいこは、この間のおじ達の行動や言動を思い出していた。実際、食事を用意してくれたり、金銭的にいくらか余裕が生まれたこともあったのは確かだ。ただ、あの紙切れの名を見た時の不自然さは、どうも信用ならないと今、男の話を聞いていて確信した。けいこは、「そう……。確かにわからないでもないな……。」「そのけいこの様子を見て、男はさらに、にやりとして「そうだろう。わかればいいんだよ。ははは。」と、ビールを一気に飲み干した。そして煙草を大きく吸い込み、ふうと一気に吐き出した。その夜、二人はなかなか眠りにつくことが出来なかった。

贈り物と二人の子供達？（後書き）

母からの贈り物は、やはりこの初老の男のことであるらしい。少しだけ、その男に理解を示し始めた二人。今後三人で、いつたいたような生活を送っていくのだろうか。次回、「いそうろう。いや、父親でそうろう。」お楽しみに。

いそろろ。いや、父親でそろろ？

そしてそれからの日々は、毎日その父親と名乗る男は昼間から酒を呑み、けいこが夕食の仕度を終える頃には眠っているという生活が続いた。朝、男は薄い毛布をぶつきらぼうに放り投げ、台所へ行きばしゃんばしゃんと自分の顔を洗う。その後、庭へ行きその様子を眺めながら縁側で酒を呑み始める。昼過ぎになり、いくらか腹が減ってくる。台所へ行き、戸棚を開くと材料がある。しかし、自分で調理する必要があるものばかりなので、面倒くさくなり、再び酒を煽り空腹を紛らわせ寝てしまう。そういう生活を送っていた。

そうした日々がしばらく続いていた。子供達は、始めの頃は様子を見ていたが、男のことはもうすでにどうでもよくなりつつあった。なぜなら、二人が家に帰ると父親が縁側で、「ぐごう。ぐごう。」と、いびきをかいて眠っている毎日であったから。そのためけいこ達は、そういう状態にいくら慣れてきていたのだ。最近のけいこは、「あ、またいそろろが眠ってる。」と、男がいるところを、平気でそう言いながら通り過ぎて行くほどだ。そんなある日、いつものように酔っ払っている父親は、子供達が何も言わずに通り過ぎた時、寂しそうにこう言った。「お前ら。まだ俺を父親だと信用してないんだな。まあ、酒ばかり呑んでいる、単なる居候くらいにしか思っていないんだろう、どうせ……。なあ、少しは俺に頼ってきたらどうなんだい。」すると、あきとが落ち着いて、「酔っ払っているのに、よくそんなことが言えるね、おじさん。」と呟いた。「おじさん」実の息子に言われたこの言葉を、男は何度も何度も胸の奥で繰り返さなくてはならなかった。するとそのうち、子供達に對して怒りが込み上げてきた。男は、酒の力も借りたのか、あきとの首根っこをわしづかみにし、自分の方へ引き寄せた。「やめてよ、あきとに何するの。」と、けいこは驚いて叫んだ。ただ男は、「お

じさんとは何だ。父親に向かって、おじさんとはいったい何なんだ。」「と憤慨して言った。あきとは、男の音量と行動に驚いて、ただ身震いしていた。男が再び「何なんだ。ええ。」と、あきとに詰め寄り再び言った。あきとは小さな声で、「ごめんなさい。」と言いつつ俯いた。それを聞いて男は、引き寄せたあきとをそのまま突き放した。そしてそれ以上の事はしなかった。突き放されたあきとは、しばらくうな垂れていた。そんなあきとに、すかさずけいこは駆け寄り「何するのよ、あんななかだいつきらい。」と、男に言い放った。男は、あきとを突き放した後、しばらく俯き、黙っていた。いったいどうしたものかと、子供達は様子を伺っていると、男の肩の辺りがひくひくと小刻みに動いている。そしてそれは次第に大きくなり、やがてわんわんと大声で泣き出した。実の父親であるにもかかわらず、子供達に「おじさん」と呼ばれ、この家の居候と位にしか考えられない自分自身に対し口惜しさでいっぱいだった。「俺はいつた何のために、この家に来たのか・・・。」「うな垂れるようにして、男は泣き続けた。さすがに大の大人がこのようであるため、子供達はしばらくあっけにとられていた。男に対して、どう声をかけたらいいかわからず、そちらの方を見ないようにただ呆然と立ちすくんでしまっただけであった。

いそろろ。いや、父親でそろろ？

泣き続けている男を背にして、けいこは、部屋の中がかなり薄暗くなっていることに気づいた。「そろそろ電気、つけよっか。」と、あきとに促した。こくりと首を動かして返事をしたあきとは、蛍光灯の下に垂れ下がっている紐を引っ張り、明かりをつけようとした。ちょうどその時、両腕で自分の涙を必死に拭きながら、男がもさつと起き上がった。そして、ふらふらしながら二人のほうへ近づいてきた。二人は身構えて、男が通るであろう通路を遮らないように、それぞれ両端に避けた。男はそのまま通り過ぎるのかと思いきや、そこですとんとしゃがみこみ、自分の両手を広げて子供達を引き寄せた。けいこは、「え。ちよつと、何。」と驚き、あきとも「も、もう言わないから。」と、戸惑い少し慌てながら言った。男は無言で、二人を自分の両腕で持ち上げようとしていた。しかし、毎日酒びたりの生活で、ろくに食事もしなかったせいか、なかなか持ち上がらない。男の顔は次第に赤くなり、どんどんそれは風船のように膨らんだ。それでもまだ二人を持ち上げようと、ひたすら踏ん張っていた。二人は最初、また自分達に何かをしてくるのではと思っていた。しかし、そんな男を見ているうちに、そしてさらに身近に触れたことで、父親という存在を意識し始めてきていた。突然現れた日のことや、酒びたりの生活を振り返っていた。結局、男は二人を持ち上げることは出来なかった。すると、ふうふうと息を切らしながら、二人をさらに引き寄せ抱え込んだ。二人はそのまま、男のそばでじっとしていた。男は、「大丈夫だ。もう何もしねえ。安心して。」と、二人の耳元でそつと呟いた。二人はその言葉を聞き、ようやく安心することが出来た。本当に安心したのだらう。あきとはその父親の肩につかまりながら、わんわんと泣き出した。それを見てけいこも、うつすらと眼に涙を浮かべていた。そしてこれからは、もっといろいろ話してみようかな、そう思い始めてきた。最初か

ら、全く良い印象など見当たらなかった男であり、けいこは好きではなかった。そして大嫌いと伝えてしまった。けれども男は、今こうして私達を抱え込んでいる。なんだか気持ちが悪くなっていくのがわかった。そしてそうしているうちに、あることに気づいた。わんわんとまだ泣いている弟。その横顔を見て「ちよつと似てるかも・・・。」と、一人微笑んだ。すると、そんな三人を包み込むかのようには、ふわっと蛍光灯の明かりが灯りだした。けいこは、いつものあの香りを密かに感じ取っていた。

いそいそと。いや、父親でそいそと？（後書き）

少しづつ距離が近づいてきた三人。次回、「思い出の川にて」お楽しみに。

思い出の川にて？

やがて本格的な冬を迎え、辺りは一面白い雪で覆われた。路には、人や犬が歩いたであろう足跡がどこまでも続いている。朝日が降り注ぐと電線から滴り落ちる水滴が、ぼたぼたと落ちてくる。家の屋根の端にあるつらはは、次第に己を溶かしながら地面の雪へと落ち、やがて静かに消えていく。そんな朝のことであった。いつものように、あきとを起こしに行ったけいこは、家中に響き渡る大きな声で「もう。今起きないなら朝ごはんはもちろん、今度からは夕ごはんも次の日も、ずっとなしだからね。お姉ちゃん、毎日あきとを起こしにくるの、本当に大変なんだから。」と、肩まである髪の毛を一つに束ねながら、布団で頭を隠しているあきとに言った。あきとは、もぞもぞと動いていた。そして、ぴたとその動きが止まった時、「え、夕ごはんもないの。」と姉に尋ねた。姉は、えへんと咳払いして、「そうよ。次の日も、その次の日も、ずっとないよえへへへ。」と、不気味な笑みを浮かべて言った。それを聞いたあきとは、それはご免だと言わんばかりに、さっと起き上がった。そして頭をぼりぼりと掻き、ふわわと欠伸をしながら洗面所の方へようやく歩いていった。「これは効くわ。」と、少しにんまりしながら、けいこは弟の後姿を眺め思った。

父親との一件以来、けいこは大人の雰囲気が見れ、あの日から日々少し余裕が生まれるようになっていた。それは弟のあきとにも伝わり、姉は以前よりもどこか雰囲気優しくなったように思った。父親は、朝はほとんど起きてこない。たまに、子供達が食事を終えて出かける頃起きてきて、「なんだ、まだいたのか。」と言うのが日常となっていた。そして出かける前に食器などを洗っているけいこを見かけると、そのそばへ寄り「いいから、置いておけ。」と言った。するとけいこは「帰ってきてから洗うのは面倒だから。」と

言うので、まあそれはそうだなと思うようにしていた。しかし最近の父親は、けいこがそう言ってもその手をそつと掴み、「いいから、俺に任せとけ。」とけいこに強く伝えた。最初の頃は、「何するのよ。」と反発し、けいこはその手を振り払いつつ、出かけて行くのが常であった。父親は日々そうした後も、二人が出かけて行ったのちに食事を済ませ、三人分まとめて食器を洗っていた。すると最近では、「ありがとう。それじゃあ、行ってきます。」とけいこは、素直に出かけていった。「全く。あいつは、母親そっくりだな。」と、一人笑みをこぼしながら、けいこが用意した朝食を採った。

そうした日々を送って徐々にお互いの気持ちを確認し合いながら、冬を越し、やがて春を迎えた。あきとは徐々に早起きするようになり、最近では父親と共に、朝食の準備をするようになっていた。逆にけいこは、あきとに起こされるまで眠っていた。あきとは、「お姉ちゃん、いい加減起きてよ。」と言いながら、姉の布団を捲ろうとそれをひっぱりながら言った。今までとは逆の立場である。姉は、「ううん。もう少し・・・。」と、頭を布団にすっぽり覆うようにしていたため、あきとは、にこにこしながら「お姉ちゃん。朝ごはん、お姉ちゃんの分食べといたよ。」と言った。すると姉は、「え。うそでしょ。」と言い飛び起きて、台所の方へ駆けていった。あきとはそれを見て、「大丈夫だよ。朝ごはんは、これからだから。あははは。」と、姉の背中に向かってげらげら笑った。姉は真顔でくると振り返り、「あきと。やったな。」と、笑っている弟の後ろに回り込み、さらに懲らしめようと、あきとのわき腹辺りを両手で抱え込むようにくすぐった。するとあきとは、「ぎゃははは。ひひひい。はあはあ。もうやめてよう。わははは。」と、笑いの頂点を迎えていた。それを聞き、姉は手を休め「ふん。解ればいいのよ。」と、勝ち誇るように言い、その場を去った。その騒ぎをやれやれと始終見ていた父親は、「おおい。いつまでやってんだ。いいから飯出来たから食ってしまえ。」と、大きな声で二人に言った。「はあ

い。」と、二人声をそろえて父親に答え食卓に向かった。

それぞれ食卓に座り、けいこは父親とあきとが用意した食事を食べ始めた。今日の朝食の献立は、ご飯、豆腐とわかめの味噌汁のほか、焼き魚と漬物であった。父親は、魚の焼き加減がうまくいったので、「けいこ。どうだ。うまいだろ。この魚。」と、得意げに言った。確かに、表面には適度に焼き目が付いていて、それとは対照的に、中身はふんわりとした食感でおいしかった。けいこは、「うん。おいしい……。かも。」と、やや照れながら父親に言った。そのけいこの反応が父親は嬉しかったようで、「な。そうだろう。」と、わははと笑いながら上機嫌で言った。そして続けて、「俺は魚を焼くのも得意だが、捕るのもうまいんだぞ。」と、二人に誇らしく言った。するとあきとが、目を丸くして「え、本当。じゃあ、今度みんなで魚釣り行こうよ。」と言った。「よし、いいだろう。」と、父親は腕まくりして「それじゃ、今度の休みの日にでも行ってみるか。」と、二人に提案した。あきとはとても喜んでいた。しかし、けいこは別にどっちでもいいやというような雰囲気でも返事をせず、ただ黙って食事を続けていた。そんな姉の様子もお構いなしに、あきとは「じゃあさ。あそこの川で釣ろうよ。」と踊るような気持ちを抑えて、父親に問いかけた。すると父親は、「ああ。いいぞ。」と自信たっぷりに答えた。けいこは、ただ黙って二人の会話を聞き、そのうち食事を終えた。

思い出の川にて？（後書き）

父親との魚つり。いや、魚捕りになるのであろうか。けいこは、
なんだかあまり乗り気ではない様子。そのけいこの想いが明らかに。
次回、思い出の川にて？。お楽しみに。（なお、最終話までカウン
ト3となりました。）

思い出の川にて？

魚は川を自由自在に行き来する。それらは大抵餌を見つけた時に、口先で二度三度突付く。それでもそれに変化がなければその後、一気に喰らい付く。そういつた習性があるため、これを知っている釣り人はよく釣れる。浮きがひよこひよこ動く度に、竿を上げ下げするようだとなかなか釣れない。あきとは、昨日父親から聞いたことを思い出しながら、明日のことを考えていると楽しみで仕方がなかった。ただ、釣竿がなくても釣れるといった父の言葉。いつたいどうするのだろうと気になっていたが、それも楽しみだと布団に包まり、ごろごろとしばらく動き回っていた。しかし、そのうちに眠りについた。

翌朝、朝食を終え家事を一通りこなしてから、三人はあの川を指して歩き始めた。あきとは、鉄製のスコップとタコ糸、けいこは裁縫箱を入れたバケツをそれぞれ持ってきた。父親は、手ぬぐいを首に引つ掛け、手にはあの風呂敷を持ってすたすたと歩いた。あきとは父親が持っている、その中身が気になったので「何が入っているの。」と尋ねた。すると父親は、「だ、大事なものだ。」と少し照れくさそうに言った。あきとは、くるりと後ろを振り返り、けいこのそばに来て「お姉ちゃん。あの中身なんだと思う。」と、なんだか自信たつぷりに尋ねた。けいこは、「あれってさ。初めて家に来た時に持ってきた風呂敷だよ。なんだろう。そうだ、川に行くから服が濡れてもいいように、きつと着替えが入っているんじゃない。」と、これしかないだろうと言わんばかりに、自信に満ちて答えた。するとあきとは、にひひと笑いながら「あの中にはねえ、大事な物が入っているんだってさ。だから、きつと魚にあげるとびっきりの餌が入っているんだよ。絶対そうだよ、だから捕れるって言うってたんだよ。」うんうん、と一人で頷きながら、けいこに懸命に

解説していた。けいこは横目でそんな弟を見やりながら、途中で切り上げた。そして、父親の方へと歩いていった。あきとがそれに気づくと、「あ。ねえ、待ってよお姉ちゃん。絶対そうだからね。」と、大きな声を張り上げた。半分呆れた様子で、はいはいとそのまま歩きながら、けいこは弟の方へ片手を横に振って返事をした。あきとは顔を膨らませぶつぶつ文句を言いながら、父親達の後を追いかけた。

しばらく歩くと、いつもの川が見えてきた。辺りはすっかり初夏の装いとなり、緑色に染まった川のほとりには、太陽の日差しと共に小さな蝶や鳥達があちこちに飛び交っていた。耳を澄ますと、暖かい風が吹き抜ける音や、ぱしゃぱしゃと水の音がする。そして時折、ぴいぴいと鳴く鳥達の声も聞こえた。そんな陽気の心地よさを感じていた時、けいこのそばをあきとはいきなり走り出した。ちょうどその時、風が吹き抜け、けいこの帽子を飛ばしそうになった。けいこは、片手でこれを抑えつつ「ふう。良かった。」と、溜息をついて言った。そんな姉の様子など一切お構いなしに、ぴいぴいと鳥達の真似をしながら、あきとは橋を一気に駆け抜け、渡ったところで立ち止まった。「まったく、もう。はしやぎすぎよ。」と、けいこは父親の後ろから小声ではそぼそと言った。「それにしても・・・。」と、けいこは続けて言おうと思ったところで躊躇した。釣りをするのに釣竿がない。そして、なんだか父親はその背後の様子からは、あまりやる気があるようには感じられなかった。父親はくりりと振り返り、「うん、どうした。」とけいこに尋ねた。けいこは、「うん。なんでもない。」と静かに呟いた。父親は、「よし、それじゃ下に降りるぞ。」と、橋の手前の横道から下へと降りていった。けいこも父親の後に続いた。あきとは、一人で橋の先に行ってしまうていたため、「なんだよう、こっちじゃないのかあ。」と、ぶつぶつ言いながら二人の後を追いかけた。

橋の下に降りると、大きな石が一つあった。その上にそれぞれ持つてきた荷物を置いた。「それじゃ、あきと。お前の身長より長い、なるべく太い木の棒を探してきてくれ。」続けて、「けいこは、スコップで近くの土を掘り返してくれ。」と二人に伝えた。あきとは、「うん、わかった。」と言い、ぴよんぴよんと跳ねながら探しに行った。けいこは父親の話の話を聞き、いったい何のためにそうするのか全く検討もつかなかった。それなので、「別にいいけど……。それでどのくらい掘り返せばいいの。」と、父親に尋ねた。すると父親は真顔で、「そうだな。餌が見つかるまでだな。」と、けいこに言った。するとけいこは、「え……。もしかして、私の仕事は餌探しなの。もしかして、ミ、ミミズとか。」と、心配そうに言った。父親は、にこにこしながら「そうだ、その通りだ。ちよつと行って来てくれ。俺はその間に、竿に付ける道具を作っているから。」と持つてきた裁縫箱の蓋を開け、風呂敷に手をつ込みペンチを取り出して言った。けいこは、引きつった表情を浮かべながら、咄嗟に「絶対嫌よ。私、ミミズだめ。私がそれやるから、代わりに行ってきてちょうだい。」と、父親に大きな声で言った。父親はそんな必死なけいこの様子を見て、笑い転げていた。「わはははは。お前、ミミズだめなのかあ。それは全く意外だな、わははははは。」それを聞いたけいこは、顔をぶくつと膨らませ顔を真っ赤にしながら、「そうだよ、し、知らなかったの。私、ああいうのダメなの。何、そんなに笑わなくなつていいじゃない。」と、むくれて言った。父親は、「ああ、そうだな。ははは。いやあ、意外だな。」と、持つてきたペンチを片手でくるくる回しながら言った。しばらく下を向いていたけいこは、静かに父親の目を睨み付け「いいから、それでいいでしょ。もう、笑い方があきとにそっくりだから腹立つわ。」と言い、父親が持つていたペンチを奪い取った。「わかった。わかった。それでいい。でもお前、道具作れるか。」と、父親が言った。「わかるわけないじゃない。教えてよ。」と、けいこは当然といった感じで、父親に言った。「仕方ないな。それじゃ、まずこのタコ

糸が釣竿につける糸だ。」と、持ってきたタコ糸をくるくる回してほつきながら言った。「そして、ここに重りと浮き、さらに餌をつける針をつける。それをこいつに通して釣りの始まりだ。ここまでわかるな。」と、父親はけいこに尋ねた。けいこは、「う、うん。」と、眉間にしわを寄せながら返事をした。その様子を見て父親は、これはちよつとけいこには難しいだろうなと思ったので、「わかつたな。それじゃまず、大きめなボタンをこの裁縫箱から探して、それからちいさな小石をこの接着剤でくっ付けておいてくれ。いいか、糸が通る部分は空けて置けよ。いいな、頼んだぞ。俺は餌を探してくる。」と言い、スコップとバケツを持って出かけてしまった。残されたけいこは、「こんなの簡単よ。しかし笑いすぎじゃない。何よ、もう。さつさと作っちゃえ。」と言いながら、注文通りの品物を作り始めた。

けいこは、あまりにも自分の作業が簡単だったので、あつという間に作り上げた。ボタンにつける小石は、自分の小指の先ほどの小さな物を取り付けた。やがて長い木の棒を肩に携え、あきとが帰ってきた。「あれ、どっかいつちゃったのかな。いいもの見つけたよ。これをきつと竿にするんだよ、お姉ちゃん。」あきとの倍はある木の棒を、肩からゆっくり下ろしてそれを眺めながら言った。けいこは、「ねえ、聞いてよあきと。お姉ちゃんにミミズ捕ってこいって言ったんだよ。だからはつきり嫌だつて言ったんだ。」あきとは目を丸くして「え、それで。」と、姉に尋ねた。けいこは続けて「そしたらさ、あきとみたいにげらげら笑い転げてさ。それがあまりにもあきとにそっくりで腹が立ったから、これを作ることにしたんだ。」と、顔を赤らめて言った。するとあきとは、「え、じゃあミミズが餌なんだ。なんだ、あの風呂敷の中身には餌なかつたんだあ。」と、残念そうに言った。その弟の様子を見てけいこは、「もう、そつういふことを言いたいんじゃないの。だから、笑い方が・・・。」と、けいこが言いかけた時、「おおい。」と二人を呼ぶ大きな声が

した。二人が振り返ると、バケツとスコップを上に掲げた父親の姿があった。「どうした、お。これはなかなかいい木の棒だ。」と言
い、あきとの頭を撫でながら言った。続けて「重りはどうした。う
ん、まあいいだろう。」と言った。「簡単よ、こんなの。」と、け
いこは得意げに言った。あきとは、下を向いてえへへと鼻の下を搔
いていた。

父親は、二人に説明しながら釣竿を作り始めた。あきとが探して
きた木の棒は、枝をそぎ落とし、先端には持つてきた工具で小さな
穴を開けた。そしてそこに、タコ糸を通し先端を団子結びにして固
定した。さらに片方の先端には、大きめなボタンを一つ通し「この
くらいかな。」とそこで接着剤をつけ固定した。その後、残りの部
分から、けいこが作った重りを通した。父親は「残るは針だな。」
とぼそつと言い、裁縫箱から取り出した待ち針を一本取り出し、先
端をペンチでJ字に曲げ糸を巻きつけた。「よし、出来たぞ。餌を
つけるか。」と言い、父親はバケツの土をかき分け一匹のミミズを
掴んだ。「いいか、この餌のつけ方も重要なんだぞ。」と、二人に
言い器用に針の先端の形通りに取り付けた。あきとは、「へえ、そ
うやってやるんだ。」と感心していたが、けいこは顔を背けていた。
父親は、「よし。これでようやく釣りが出来るぞ。あきと、頑張れ
よ。」と言い、餌の付いた釣竿を手渡した。「やったあ。大きい魚
釣ってやる。」と、意気込んであきとは針を川面に投げ込んだ。「
私はちよつと休むから。」と、けいこは木の日陰で休むことにした。
父親とあきとは、「そつだ、よし浮きが沈んだぞ。今だ。引き上げ
ろ。」「え、何。何。うわ、ちくしょう。」などと言いながら、悪
戦苦闘を繰り返していた。

やがて昼になり、一度休憩することになった。父親は持つてきた
風呂敷の中から3個のおにぎりを取り出し、「ほら、食べる。」と
二人に手渡した。おにぎりは大きな丸型で、のりで包んであった。

「おにぎり持つてきたんだ。」と、二人は驚きそのうち食べ始めた。父親も食べながら、「いいか、あきと。昨日言ったように浮きが動いたら少し待て。しばらくして、一気に下に沈んだら思いっきり上に引き上げる。いいな。」と、あきとに伝えた。あきとは、「うん。そうしようと思っっているんだけど、浮きが動くとき引き上げなくなっちゃうんだよね。」と、照れながら言った。「そこを我慢しろ。いいな。そうすれば絶対釣れる。」と、口をもごもごと動かしながら父親は言った。「あきとは、意外とせっかちだからねえ。ふふふ。」と、けいこは意味深に微笑んだ。それを聞いたあきとは、「今度は大丈夫だよ。絶対釣ってやるさ。なんだよ、お姉ちゃん。笑うならミミズ、ほつぺたにくっ付けるぞ。」と、片方の手をバケツに突っ込んで言った。するとけいこは、「うそ。笑ってない。あきと、頑張ってね。」と、引きつった笑顔であきとに言った。その二人のやりとりを見ていた父親は、大きな声で笑っていた。さらに草や木々も、かさかさと密かにざわめきだした。三人の動きに合わせるかのように、細かく左右に動きだしていた。

思い出の川にて？（後書き）

いよいよ魚釣りが始まった。三人の収穫は果たしてどうなるのであろうか。そして、父親の風呂敷の謎。次回、けいこの苦悩。お楽しみ。最終話まで、残り2話となりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7123x/>

真実とは。

2011年11月17日16時33分発行